

日頃、元気な妻を知っている人は、妻のお産の軽さや妊娠中・出産後の元気さを見て、「さもありがたみ」と思ったかもしれない。それは半分正しく、半分正しくない。

元気な妻でも、妊娠中、食欲不振や腰痛、大腿部痛にもなった。後期には、妊婦検診で問題にされることは無かったが、むくみが出た。週1回、私が安産鍼をし、また体質的な問題を緩和する鍼をした。また問題が出た場合にはその度、それに対応して鍼や漢方薬を選用了。妻自身も摂生に努めていた。好きなコーヒーを減らし、食べられない時には無理をせず、夜更かしを改めていた。そしてほとんど、妊娠前と変わらず、家事をし、PTAや生協の役員の仕事をして、活発にからだを動かして働いていた。妊娠十月目、夏休みには、子供たちと毎朝、ラジオ体操をした。日頃の健康だけでなく、妊娠中のこうした生活が効いたのである。一番の不摂生と言え、頻繁にあった病院での検診だろう。車で片道25分。検尿などの検査をし、その後、超音波検査画像を助産師と一緒に見たり、問診を受けたりする。その後、支払いの順番を待つ。車で帰る。3時間、場合によっては、それ以上かかる。昼食が遅れる不摂生を避ける為に、妻はお弁当を持って行った。

昔、産婆さんがいて、自宅でお産するのが一般的だった時代と比べて、病院出産が一般的になった現代は、お産の事故が減っているのだろう。しかしそれは病院出産が優れているということを意味しない。衛生環境、栄養状態、生活環境といった妊婦を取り巻く環境が、現代は昔に比べて、格段に良くなっているからだ。妻は2度、助産院出産をした。妻にとってはお産とはそういうものだった。今回の出産がより安心感があって、快適だった

ということはなく、ひたすら違和感を持ったようだ。開設されたばかりの院内助産所が、万が一を恐れる余りに、これまでの病院出産と同様の処置をしたがる気持ちは理解できる。事故が起これば、閉所を余儀なくされるかもしれないからだ。

院内助産所は、「自然なお産」を志向して開設されたものだった。と同時に、産科医不足による「お産難民」が問題になる中で、産科医の負担を減らす意義もある。この院内助産所は誰でも利用できるわけではなかった。お産の危険が少ないと医師から判断され、しかも自然分娩したいという強い意志と、その為の努力ができる妊婦だと、案内には記されている。もっともな内容だと思う。

お産を安全で軽くできるかの勝負は、既に妊娠前に始まっている。妊娠前の体質に妊娠という変動が加わる。[妊娠前の体質+妊娠中の生活→お産の状態]という図式が成り立つ。体質的に問題が多かったり、妊娠中に不摂生が多ければ、「自然なお産」は望めない。現代西洋医学は大きな異常に対するのが得意だから、そういう妊婦はそれを頼るのがいいだろう。しつこく検診して、異常に備えてくれる。しかしそういう妊婦でなければ、「自然なお産」ができる筈である。里山的な自然な医療である鍼灸・指圧や漢方薬の力を借りれば、もっとそれが可能になる。

過剰な処置をする病院出産より、「自然なお産」が一般的になれば、自然の力・自然のあり方を深いところで知ることができる。それはお産だけの問題ではなく、世の中を作る根本的な価値観に通じている。(2009年9月秋分)